

されても当然のように出て行つたし、往診も断らなかつた。

広島にいる若い頃の父はよくお酒を飲んでゐた。飲み会から帰つて来ないと母に頼まれ父を迎えにいったが、帰り道でわざとよろよろしたり、道路に寝転んだりして困つたことがある。その時は父の手を引つ張つて、なんとか家に帰つたように思う。また、酔つて夜遅くに戻つた後子供たちがすっかり寝静まつた布団の上を転がりまわるので、「ヤマトノオチダイ」と嫌がられていた。しかし、父にとつては至福の時であつたに違いない。

精神病院の患者さんはよく家に帰りたがつたが、退院できない時、父は「暖かくなつてからね」とか、「暑さがやわらいでからね」などやんわり言うつと語つていた。だから、少しでも家族的な雰囲気を感じてほしかつたのか、父は毎年、患者さん全員に誕生日プレゼントをあげていた。食べても喉が詰まらない贈り物は卵ボーロと決まつていて、赤いリボンをかけてささやかな祝意を表していた。

父がもう65歳を過ぎていた頃、何気なく聞いたことがある。「お父さんがこれからは是非したいこと、夢は何?」と。父はしばらくじーつと考えて、「残兵を結集させてソ連に攻め入りたい」と言つた。冗談だろうとは思つたが心底驚いた。そんなことは不可能だとわかつていても本音が出たのだろう。敗戦に乗じて日本に

攻め込んだソ連を生涯許せなかつたのだ。青春を共に過ごした仲間、一緒に戦つた友のことはいつも心にあつたと思う。

晩年、父が既に寝たきりになつていた時、どこにも行けなくて毎日つまらないでしようと思つくと、「落語も聞けるし、何より楽しい。今までであつたらんなことを思い出しては楽しんでるよ」と言つていた。父は楠正成、真田幸村、推理小説、焼津のはんべん、うぐいす豆、広島カープ、アニメの「忍者ハットリくん」そして、映画「男はつらいよ」の主題歌、特に「奮闘努力のかいもなく今日も涙の日は落ちる」というフレーズが好きだつた。父の人生にも涙の日は落ちるようなつらい時が数々あつたに違いない。それでも今は火星から、子供や孫やその配偶者、ひ孫たちがそれぞれに頑張つてゐる姿を見て、奮闘努力のかいがあつたと、てれくさそうに笑つてゐることだろう。

(市川雄一 22)

父を語る―父鋼典の思い出! (その二)

『医者役目とは』 四女 中島香天

『医者役目とは』 四女 中島香矢

父は亡くなつた戦友の分まで子供を望み、母は7人の子を生んだ。2人の男子の名前には「兵」がつく。8人目は流産だつたが男が生まれていたら多分「海兵」だつたね、と姉妹で話したことがある。空、陸、海で散つた仲間への追悼を込めて、息子達を名付けたのかもしれない。戦後まだ宮崎で開拓をしていた頃のこと、長女が高熱でけいれんを起こすなどした夜、医者を呼んだが時間外で診てもらえず、悔しい思いをした父が、それなら自分が医者になると決意したと母から聞いた。そのせいか、父はいつも勤務する病院の近くに住み、夜中に何度呼び出